

令和2年度文部科学省委託事業「つながる食育推進事業」

令和2年度愛媛県子ども食育連携推進事業
障がいのある児童生徒が生き生きと取り組む食に関する指導
～家庭や地域の人材を活用した体験学習を通して～



文部科学省の委託を受け、愛媛県立新居浜特別支援学校【本校（知的障がい教育）・分校（肢体不自由教育）】を実践校に、栄養教諭を中核として家庭を巻き込んだ取組を推進し、「児童生徒の食に関する自己管理能力の育成」「栄養教諭の実践的な指導力の向上」を図るため、本事業に取り組みました。



くすみん くすくす くすのつきー

令和3年2月

愛媛県教育委員会



ぶんこちゃん

1 事業の概要

(1) 研究の意義

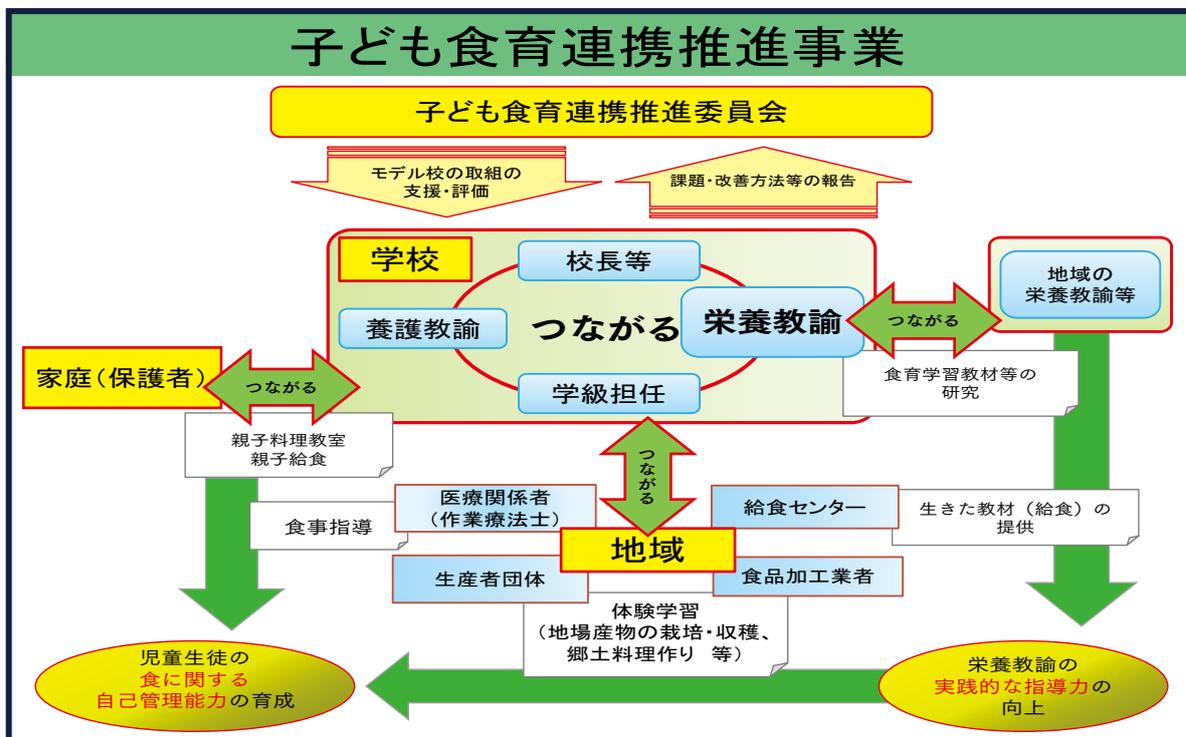
実践校である愛媛県立新居浜特別支援学校は、本校が知的障がい、川西分校は肢体不自由・知的障がい・てんかん・心臓疾患などを併せ有する児童生徒が在籍している。児童生徒にとって「食育」はまさに「生きる力」そのものを育むことである。

本校では、知的障がいの特性により、学習したことを実生活に結び付けることが難しく、感覚過敏やこだわり等の特性による偏食、偏食からの肥満傾向といった食に関する課題がみられ、川西分校では、肢体不自由等の特性による身体操作の難しさ、口腔機能の発達の遅れ、認知等の未発達、自食や飲み込む機能に困難さがあるなど、それぞれ課題を抱えていた。

本事業に取り組む意義は、①親子料理教室や食育講演会などの活動を通して、学校の取組を家庭につなげ、朝食指導を含めた食生活の改善を図ることができる ②地域と連携した体験学習や全校体制での系統的で継続した食指導を通して、児童生徒が将来自立し社会参加するための基盤として、望ましい生活習慣や健康を自己管理する力を養うことができる ③これまで校種の違いにより関わりが少なかった県立学校と小中学校の栄養教諭の連携を強化することで、指導力の向上のみならず、地域の全ての学校における食に関する指導の充実を図ることができることであると考える。

世界中がコロナ禍に陥っても、「子どもの健やかな学びの保障」との両立を図るため、学校における感染とその拡大リスクを低減しつつ、実施可能な食育に挑戦し、地域や家庭に向けて食育の大切さを強く発信し続けた、意義ある1年であったと振り返るとともに、「新しい生活様式」とは、止めてしまうことではなく、新しい方法で、新しい道を切り開くことだと考える。

(2) 推進体制



【 子ども食育連携推進委員会構成員 】

- 学識経験者（松山短期大学教授）
- 保護者代表（各校PTA会長）
- 農作物販売団体（新居浜市農業協同組合）
- 実践校（愛媛県立新居浜特別支援学校）
- 地域行政（新居浜市教育委員会学校教育課・学校給食課）

2 取組の実際

子ども達の自立へ向け、育成を目指す資質・能力の3つの柱（【①知識・技能】【②思考力・判断力・表現力】【③学びに向かう力、人間性等】）ごとに、ねらいを持った取組を実践した。

- ①【知識・技能】 ⇒ 何を知っているか、何ができるか
 ②【思考力・判断力・表現力】 ⇒ 知っていること、できることをどう使うか
 ③【学びに向かう力、人間性等】 ⇒ どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか
 * 「児童生徒の食に関する自己管理能力の育成」に関する取組には、 マークを

「栄養教諭の実践的な指導力の向上」に関する取組には、 マークを付けている。

(1) 各実践校の主な取組

① 日常の指導・体験活動

| | 本 校  | 川 西 分 校  |
|------------|--|---|
| 活動名 | 新居浜市学校給食センター見学（12月） | 「給食の歌」の制作 |
| 対 象 | 小学部5年10名、中学部1年22名 | 全校児童生徒、教職員 |
| ねらい | <ul style="list-style-type: none"> 給食を作る様子や調理員の仕事を見学し、食への理解や仕事に対する興味・関心を高める。【①③】 給食センターで働く人について知る。【①②】 | <ul style="list-style-type: none"> 給食を楽しく、「苦手な食べ物もみんなと一緒に頑張って食べよう！」という気持ちになれるような音楽を作成し、給食の時間に流すことで、給食を食べる意欲向上につなげる。【②】 |
| 内 容 | <ul style="list-style-type: none"> 給食を作る様子を見学し、出来上がった給食を食べた。 調理服を着用し、具材を混ぜる模擬体験や質問・感想などの発表を行った。 見学では見られなかった場面は、動画や写真などで補足説明を受けた。 | <ul style="list-style-type: none"> 児童生徒から「給食の歌」に込めたい思いや言葉（キーワード）を募り、作曲家に曲作りを依頼した。（作詞作曲は委託） 作曲家の方と児童生徒が触れ合う機会を設け、より児童生徒の実態に応じた曲作りを行っていた。 完成した曲を音楽の時間に歌ったり、給食の時間に流したりした。 |
| ☆成 果 | <ul style="list-style-type: none"> 調理員が大きな釜で調理する様子を見て感動したり、所長や栄養教諭に質問をしたりと、意欲的に学習に取り組んだ。 調理員の模擬体験を通して、仕事の大変さや食への感謝などを思う様子が見られ、感謝の気持ちを感じながら給食を食べることができた。 | <ul style="list-style-type: none"> 児童生徒の言葉や思いが曲の中に盛り込まれたことで、元気よく歌うことができ、給食も頑張るって食べようという気持ちが生まれた。 給食を作ってくれている人への感謝の気持ちが強くなり、「いただきます」「ごちそうさま」の言葉の大切さを改めて感じる事ができた。 |
| ★次年度へのステップ | <ul style="list-style-type: none"> 自分たちの食を支える人たちについて知ることができたので、今後もこのような機会を作りたい。  | <ul style="list-style-type: none"> 「給食の歌」を本校の児童生徒にも知らせ、歌を通じて食に関する交流をさらに深めていきたい。 給食を食べることだけではなく、学校・家庭で丁寧な手洗いをする事ができるように、正しい手洗いの仕方を学ぶ機会を作りたい。 |

| | 本 校  | 川 西 分 校  |
|------------|--|---|
| 活動名 | 愛媛県立西条農業高等学校との 交流及び共同学習（作業学習） | 防災食アレンジ調理実習 （10月） |
| 対 象 | 高等部農業班 1～3年生（16名） | 高等部生徒（6名） |
| ねらい | <ul style="list-style-type: none"> ・ 農業体験を通して苦労や収穫の喜びを知り、日常での食への感謝の気持ちをもって食べる意識を育てる。【①③】 ・ 作業学習を行う中で、両校の生徒が同じ目標を持って取り組んだり、関わりあったりすることで、協力したり喜びあったりする活動を共有する。【①②③】 ・ 農業体験を通じた交流及び共同学習を行い、共にふれあいながら一緒に活動することで相互理解を図る。【③】 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 県内の料理研究家と連携し、災害時を想定した設備や道具で調理実習を行い、様々な工夫の大切さに気付けるようにする。【①】 ・ 災害時に必要な栄養の取り方を考え、実践する力を養う。【②】  |
| 内 容 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 1回目（9月）稲刈り ・ 2回目（10月）里芋の収穫 ・ 3回目（11月）ミカンの収穫 ・ 4回目（12月）サラダ菜の収穫と ホウレン草の種まき | <ul style="list-style-type: none"> ・ 停電時を想定し、カセットコンロの使い方を確認した。 ・ 鍋でご飯を炊き、ポリ袋を使ってだし巻き玉子を作った。 ・ 栄養バランスを考えて、備蓄食品の缶詰や乾物などから具材を選び、味噌汁を作った。 |
| ☆成 果 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 主に収穫作業を行ったが、収穫の喜びを知ることで、日常での食への感謝の気持ちをもって食べる意識を高めることができた。 ・ 西条農業高等学校の生徒と同じ農作業をする中で、本校では体験できない農作業を知り、会話を通してコミュニケーションをとるなど協力して活動することができた。  | <ul style="list-style-type: none"> ・ 今回、カセットコンロを使ったり、缶詰を開けたりすることが初めてという生徒もあり、新たな経験の機会となった。 ・ 「身近なものが災害時に役立つことが分かった」「限られた道具でもおいしく調理できた」といった感想が多く聞かれるなど、様々な気づきを得る機会となった。 ・ 友達と一緒に工夫したり、協力したりしながら活動したことで、調理への関心が高まった。家庭でだし巻き玉子を作ってみたという生徒もいた。 |
| ★次年度へのステップ | <ul style="list-style-type: none"> ・ 今回は、本校生徒がスクールバスを利用して西条農業高校に出向いた。次年度も継続して実施する場合は、スクールバス運行の予算が必要である。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒自身が主体となって、家庭の備蓄食品を栄養の面から見直したり、調理を実践したりできるようにすることを目指したい。そのために、授業の内容を家庭と共有するなど、積極的な情報発信を行っていきたい。 |

② 家庭・地域との連携



| | 本 校 | 川 西 分 校 |
|------------|---|---|
| 活動名 | 親子料理教室（8月） | 新居浜市学校給食センターとの連携（12月） |
| 対 象 | 中学部生徒と保護者（2日間 計22名） | 全校児童生徒 |
| ねらい | <ul style="list-style-type: none"> ・ 地域の特産物や旬の食材について、知識や理解を深める。【①】 ・ 共に作ったり食べたりする楽しさや、おいしさを感じることで、食への興味・関心を高める。【②】 ・ 児童生徒と保護者が共に料理をすることで、親子のふれあいの場を広げたり、これまでの食生活を見直すきっかけづくりにしたりする。【③】 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 本校に給食を提供している新居浜市学校給食センターの栄養教諭に児童生徒の給食の様子を見てもらうとともに、児童生徒との交流の機会を通して体制づくりを強化する。【①】  |
| 内 容 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 「親子で簡単！ヘルシー野菜料理を作ってみませんか？」をテーマに、野菜料理家 やのくにこ氏を講師に招き、親子料理教室を開催した。 ・ 新居浜市特産品の「えび天」や「生椎茸」、旬の食べ物の「なす」や「トマト」を使い、朝食としても活用できる簡単料理を作り試食した。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 学校給食センター調理員の衛生管理について、調理服の体験コーナーを設置した。 ・ 地域の食材を生かした献立作りの様子を知るため、新居浜市の郷土料理に関する掲示を行った。 ・ 栄養教諭による給食の時間の交流を図ったり、感謝の気持ちを込めた手紙を制作した。 |
| ☆成 果 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 新居浜市特産品の「えび天」を使った料理が意外と簡単に美味しくできたことで、家庭でも作ってみようという意識が高まった。 ・ 保護者対象のアンケートでは、「子どもが包丁を持って、上手に野菜を切っていたので、びっくりした」等の意見があった。子どもたちの「できた！」「おいしいね！」という達成感あふれる言葉に保護者も教職員も喜びを感じており、家庭への食事力アップにつながった。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 毎日給食を提供してくれる学校給食センターでは、安全第一に作ってくれていることを理解することができた。 ・ 調理員さんの服装を体験できて楽しかった。また、衛生面での管理がしっかりできていることを知ることができた。 ・ 新居浜市の郷土料理がこれから給食に出てくるのが楽しみに思えた。  |
| ★次年度へのステップ | <ul style="list-style-type: none"> ・ 参加者全員から「次回も参加したい」という評価をいただくことができたため、次年度も夏休みに実施したい。  | <ul style="list-style-type: none"> ・ 学校給食センターの取組を校内で紹介する機会を設定し、つながりを深めたい。 ・ 学校給食センターへの見学、オンラインなどを活用して実際の調理場面などを学ぶ機会を作りたい。 |

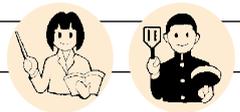
(2) 両校が連携した取組



| | |
|------------|---|
| 活動名 | パン作り体験（10月） |
| 対 象 | 本校中学部2年生13名、川西分校の中学部3名 |
| ねらい | <ul style="list-style-type: none"> ・パン作りの過程を知り体験することで、感謝の気持ちをもって食べたり、残さず食べたりする意識を育てる。【①③】 ・本校と分校の生徒がパン作り体験を通じた交流及び共同学習を行うことで、調理する楽しさや美味しさを共有する。【②】 |
| 内 容 | ・ジャパンホームベーキングスクール準師範の村上亜希氏を講師に招き、カレーウィナーパンとチョコパン作り体験を行った。 |
| ☆成 果 | <ul style="list-style-type: none"> ・活動時間が経過するにつれ、両校の生徒が協力して作業する場面が増えてきた。活動の終盤には、本校生徒の「おいしい？」という言葉に、分校生徒がうなづく様子を見せ「おいしい」と答えたりするなど、コミュニケーションを取ることができた。 ・体験することで、パン作りの魅力やおいしさを感じることができた。また、友達と協力して作業したり、出来上がりを共に喜んだりできることへの嬉しさ、自分の作った形のパンができる調理の楽しさなど、普段の授業ではなかなかできない体験に、充実感を味わうことができた様子がかがえた。 |
| ★次年度へのステップ | <ul style="list-style-type: none"> ・分校生徒は障がいの特性による身体操作の難しさや口腔機能の発達の遅れなどから食事に時間がかかるため、発酵や焼き上がりを待つ時間を利用して先に食事を開始したが、「いただきます」や「ごちそうさま」を本校生徒と一緒にできなかったことで活動時間のずれを感じた。 ・今後も、今回のような本分校の交流活動を継続していきたい。 |



| | |
|------------|---|
| 活動名 | 食育講演会（オンライン）（8月） |
| 対 象 | 本分校の教職員、本校の保護者（希望者） |
| ねらい | ・障がいのある児童生徒によく見られる食べ方の特徴を知り、適切な支援方法について学ぶことで、日々の給食指導に生かす。 |
| 内 容 | ・Zoomを活用して、茨城県立つくば特別支援学校指導看護職員の星出てい子氏に講演をしていただいた。 |
| ☆成 果 | <ul style="list-style-type: none"> ・体の構造について実食体験をしながら学ぶことができ、子どもの発達段階を把握する重要性を改めて感じた。 ・講演後のアンケートでは子どもの食に関する具体的な事例が聞きたいという声が多く、また参加したいという意見が9割であった。保護者からも普段の食事に生かしたいという意見があった。 |
| ★次年度へのステップ | <ul style="list-style-type: none"> ・後日、茨城県立医療大学講師の中村勇氏と星出氏に依頼し、個別の指導事例についての研修会を開催することができた。今後も外部の専門家等と連携して食に関する指導の専門性を高めていきたい。 |



(3) 栄養教諭間の連携



| | | |
|------------|---|---|
| 活動名 | 栄養教諭による食に関する公開授業（11月） | |
| 対象 | 新居浜市公立学校在籍の栄養教諭・学校栄養職員（9名） | |
| ねらい | ・小学校特別支援学級及び県立特別支援学校小学部用の共通食育教材の開発のため、授業実践や研究協議を行い、栄養教諭の指導力向上と連携の強化を図る。 | |
| 内容 | ・公開授業（生活単元学習、小学部3年1・2・3組「何でも食べて元気になろう」）を行い、授業後に研究協議を行った。 | |
| ☆成果 |  | ・研究協議の中で、児童の発達段階に応じた指導内容について教諭からの説明や、次時から使用するワークシート・元気マンシート等を紹介できたことで、小学校の特別支援学級に活用できる教材・教具のヒントとなる情報が共有でき、栄養教諭間の連携強化につながった。 |
| ★次年度へのステップ | <ul style="list-style-type: none"> ・今後も、栄養教諭間の連携強化を図るための交流会や公開授業の持ち方について、検討していく必要がある。 ・次年度は新居浜市栄養教員部会の活動内で、献立を教材とした給食の時間における指導のための教材作りを行うなど連携強化を図りたい。 |  |



| | | |
|------------|---|---|
| 活動名 | 県立学校栄養教諭・学校栄養職員研修会（12月） | |
| 対象 | 県立学校在籍の栄養教諭・学校栄養職員（13名） | |
| ねらい | ・県立学校在籍の栄養教諭・学校栄養職員に対して、職務の本質やその在り方を理解し知識・技能の向上を図るため、実践的な指導力と使命感を養い、幅広い知見を習得する。 | |
| 内容 | ・12月に、公開授業（生活単元学習、高等部普通科3年1組「目覚ましスイッチが入る朝食を作ろう」）を授業参観し、2つの視点（①栄養教諭の専門性を生かしたチームティーチングであったか ②ねらいを達成するために適切な指導過程であったか）について協議を行った。また、自校の授業等で使用している指導媒体や参考となる資料等を紹介し合い、情報を共有した。 | |
| ☆成果 | <ul style="list-style-type: none"> ・新居浜市栄養教員部会で作成した教材を活用し、朝食についての授業を行った。小学校の特別活動で使用している教材をアレンジして授業実践したことで、特別支援学校における「朝食」に関する取組例を紹介することができた。参加者は、自校で授業をする際の教材・教具・手だてについての参考とすることができた。 ・ICT（タブレット）を活用し、話し言葉の他に写真や絵などの視覚的な手がかりを用いることで、生徒へ朝食の役割を分かりやすく伝えることができた。また、ICTの有効活用方法を学べたことは、栄養教諭の授業実践力の向上につながったと考える。 |  |
| ★次年度へのステップ | ・今後も障がい特性に応じた公開授業の機会を設け、特別支援学校や特別支援学級における食に関する指導の在り方について研究していきたい。 | |

3 取組の成果

- ・近隣校との交流及び共同学習・地域の施設や専門家を活用した体験学習を通し、児童生徒が栽培や収穫、調理、実食など食に関する知識や技能を意欲的に学ぶことができた。実際に子どもたちが自ら体験することで、自分たちの食事作りに関わる人たちへ関心を持つようになり、感謝の気持ちや残さずに食べようとする気持ちが育まれた。
- ・親子料理教室や給食試食会、食育講演会などに参加した保護者からは「参加してよかった。」という評価を受けており、参加して得たものを普段の食事に取り入れてもらえるなど、家庭でも食生活を意識した取組が見られるようになった。
- ・栄養教諭と連携した学習により、普段給食で食べている食材やその栄養素に興味・関心を持ち、友達や教師と確認しながら給食を食べる様子が見られた。また、朝食の大切さと朝食を食べることの意義に気づき、自分の食事内容を振り返って食事内容について考える児童生徒も見られた。
- ・教職員の食に関するアンケートからは、改めて、日々の栄養教諭と教員とのかかわりの重要性が分かる結果となった。特に、給食指導や衛生面に関する項目については、教職員の意識の高まりがみられた。これは、事業の成果に加え、今年度については、日々の新型コロナウイルス感染症への対策なども要因として考えられる。

4 今後の課題

- ・肢体不自由特別支援学校では、給食の食材を提供していただいている地元生産農家等との直接的な交流は難しい現状があるが、本事業において地域の教育資源や学習環境等の活用の有用性が認められたことから、新型コロナウイルス感染症対策で導入されたオンライン学習の知見なども活かしながら、今後、地域との連携の在り方についても検討を進めるとともに、学校での食育の実践について、積極的な情報発信を行い、家庭、地域社会との連携を深めていきたい。
- ・学校の取組に参加してくれる保護者はまだ限られているため、普段の食生活につなげられる活動を設定し、SNSを通じて活動への参加を呼び掛けるなど、食育に参加する保護者を増やし理解を広げたい。また、今回有効であった取組について再度考察し、児童生徒の発達段階や学習指導要領の指導内容等も考え併せて、より有効な取組が続けられるように、学習内容の精選と教材教具の工夫を行いたい。

歌詞は、愛媛県立新居浜特別支援学校川西分校の児童生徒・教職員から、「歌に込めた思いや言葉」を募集して作りました。



給食の歌

作詞・作曲 中村和憲

「いただきます」はステキなことば
わたしの明日をつくってる
たべものさんたち ありがとう
みんなのおかげで 元気出て
心の栄養 満タンに
作ってくれた たくさんのひと
みんなに感謝 ありがとう
お昼からもがんばろう

体 栄養 考えて
作ってくれた おいしい給食
みんなでたのしくたべたいな